

松 山 大 学 論 集
第 5 卷 第 5 号 抜 刷
平 成 5 年 12 月 発 行

旧制中等学校教員のリクルート
——帝国大学文学部卒業生を中心にして——

山 田 浩 之

旧制中等学校教員のリクルート

——帝国大学文学部卒業生を中心にして——

山 田 浩 之

1 問題の所在

本論文の目的は、文学部卒業生を中心とする帝国大学卒業生の中等教員への就業状況、および彼らにとっての中等教員という職業の位置づけを明らかにすることにある。

戦前においては、帝大卒業生の多くが中等教員となり、中等教育界における重要な位置を占めていた。明治期においては、帝大卒業生がとくに中学校長の多くを占め、「社会的な待遇という点からいえば、東大系が高師系をはるかに圧倒して」おり、「東大系はわが国の最高学府を出たものにふさわしく、高師系よりも高い待遇を得ているものが多いことが歴然としている」と指摘されている¹⁾。また、帝大卒業生が中等教員社会の頂点に立ち、その重要なポストを占めていた事例も報告されている。山口県においては、帝大卒業生が主要都市の中学校校長を独占し、給与、昇給においても他の学歴を持つ教員より優遇されていた²⁾。

このような帝大卒中等教員をもっとも多く供給したのは文学部であった。後で指摘するように、文学部卒業生は帝大卒中等教員の過半数を占め、多くの者が校長となっていた。『東京大学百年史』においても「中学教師の職は多くの文学士にとって最もありふれた就職口であった」とされ、文学部卒業生には中等教員、高等教員が多かったことが指摘されている³⁾。

しかしながら、このような従来の研究は、以下の三点において不十分である

と言える。まず第一に、従来の研究の多くが、記述的な分析、あるいは一地域の事例にとどまっており、中等教員となった帝大卒業生の全国的な状況は実証的に明らかにされているとは言えない。そのため、帝大による中等教員の供給過程、あるいは中等教員内における帝大卒業生の分布状況の実態を全体像として描き出す必要がある。

第二に、これまでの文学部卒業生の分析が基礎としていた『文部省年報』では、不完全な情報しか得ることができない。『文部省年報』に記載された卒業生の就職状況は、教員が「学校職員」として一括され、学校段階、学校種別による分類がなされていない。そのため、従来の研究の多くは文学部卒業生には教員が多いという指摘にとどまり、帝大文学部が中等教員をどのように輩出していたのかが明らかにされていない。

第三に、文学部卒業生のキャリアが実証的に明らかにされていないことである。既存資料の多くは各時点の状況を集計したものであり、個人のキャリアを追うことが不可能であった。そのため、帝大文学部卒業生のキャリアは十分に検討されておらず、彼らにとって中等教員はどのような意味を持った職業であったのかはほとんど明らかになっていない。

本稿では、帝大卒業生の就業状況を捉える資料として、帝大卒業生によって結成された学士会の名簿である『会員氏名録』を使用した⁴⁾。その理由は次の三点による。まず、第一に、帝大の全学部の卒業生が網羅されていることである。そのため、たんなる一機関、あるいは一地域の事例ではなく、帝大卒業生全体の動向が把握できる。次に第二は、学士会の名簿には、出身大学・学部、および卒業年の他に、具体的な職業名が明記されていることである。それにより、帝大卒業生の実際の就業状況をより詳細に明らかにすることができる。第三には、異なる時点間の名簿を比較することにより帝大卒業生のキャリアが追跡できることである。帝大卒業生の転職状況を検討することにより、彼らにとっての職業の威信構造、およびその中で中等教員の位置を明らかにすることができる。

本稿では、大正9年、昭和5年に発行された学士会名簿を使用した。この名簿に記載された大正9年におけるすべての帝大卒中等教員494名、文学部卒業生1,801名、また昭和5年における帝大卒中等教員798名、文学部卒業生2,975名についてデータベースを作成した。このデータベースの分析結果をもとに、帝大卒中等教員の動向、文学部卒業生の就業状況を検討した⁵⁾。

以下では、まず、第一節で、帝大卒中等教員の分布状況、および大学・学部別の中等教員輩出状況を検討する。次に、第二節では、分析を文学部卒業生に絞り、彼らの就職状況、転職状況を明らかにし、文学部卒業生にとっての中等教員の位置づけを考察する。そして、そのことを通じ、帝大による中等教員養成史の一端を明らかにする⁶⁾。

2 中等教員社会における帝大卒業生の位置

(1) 帝大卒中等教員の勤務校と地位

これまでも指摘されてきたように、戦前の中等教員に占める帝大卒業生の割合は低く、彼らは量的には少数派であった。『文部省年報』によれば「大学卒業業者」とされる者が中学校教員全体に占める割合は、昭和5年において16.8%にすぎなかった。また、本分析によって特定した帝大卒中等教員のうち国内に在職していた者は大正9年に471名、昭和5年に745名と、それぞれ全中等教員の3.9%、3.1%でしかなかった。

しかしながら、先にも指摘したように、こうした少数派でしかなかった帝大卒業生は中等教員社会内において高い地位を占めていたとされている。ここでは帝大卒業生の地位別分布状況により、その地位の高さを推測してみよう。本分析によって特定した帝大卒中等教員のうち、国内において校長に在職していた者は大正9年に146名、昭和5年に179名と、それぞれ全中学校長の18.5%、12.5%をも占めていた。全教員に対する校長の割合である校長率を算出すれば、昭和5年における帝大卒業生の校長率は24.0%となっていた。同時期の中等教員全体の校長率が5.9%、高師卒業生が18.7%であったから、帝大卒業

生の校長率は非常に高く、帝大卒業生は高師卒業生よりも高い割合で校長を輩出していたことになる。このように帝大卒業生は、数の上では少数派であったが、校長への昇進においても優遇され、戦前の教員社会の頂点を占めていたことが推測される⁷⁾

表1 出身学校別、中等教員・校長の学校種別分布状況

単位：%，（ ）内は人数

		教 員				校 長			
		師範	中学	高女	計	師範	中学	高女	計
大正9	帝大卒業生	4.2	84.9	10.8	100.0(471)	5.5	80.1	14.4	100.0(146)
	高師卒業生	30.5	52.2	17.2	100.0(2689)	28.7	33.8	37.5	100.0(317)
	全国教員	12.7	63.5	23.8	100.0(12017)	11.8	46.1	42.1	100.0(794)
昭和5	帝大卒業生	17.4	61.8	20.9	100.0(743)	7.8	64.2	27.9	100.0(179)
	高師卒業生	24.0	49.4	26.7	100.0(4195)	12.5	38.4	49.1	100.0(784)
	全国教員	10.0	56.8	33.3	100.0(24281)	7.4	38.9	53.8	100.0(1428)

注：「教員」には「校長」の値も含む。以下の表もこれに従った。また、ここには国内に勤務する者のみの値を示した。

出所：学士会『会員氏名録』、『東京高等師範学校一覧』、『広島高等師範学校一覧』、および『文部省年報』各年度による。

これをさらに詳しく検討するため、表1には中等教員の出身学校別分布状況を示した。まず、大正9年には、帝大卒業生の8割以上が中学校に、高師卒業生の3割が師範学校に在職していた。これらはそれぞれ全国の学校種別教員比よりもかなり高い値であり、この時期には、帝大卒業生は中学校を、高師卒業生は師範学校を中心に分布していたと考えられる。また、帝大卒業の校長では、中学校長の割合が非常に高く、約8割であった。その一方で、高師卒業生は中学校長の割合が、教員比に比べて低くなっていた。

ところが昭和5年になると帝大卒業生に占める中学校在職者の割合が減少し、師範学校、高等女学校在職者の割合が高くなった。戦前の師範学校には高師出身者が集中し、師範学校に就職する大学出身者は少ないとされ、「たまさか大学出身者が師範学校へいってもやがては飛び出してしまう⁸⁾」とも言われて

いた。しかし、この時期においては、かなり多くの帝大卒業生が師範学校に就職しており、帝大卒中等教員に占める師範学校在職者の割合は17.4%にまで達していた。このように昭和5年の帝大卒業生はほぼすべての校種にわたって分布しており、必ずしも中学校中心の分布とは言えなくなっていた。

だが、こうした量的な拡大にもかかわらず師範学校における帝大卒業生の校長の割合は低く、わずか7.8%にすぎなかった。これは、師範学校校長の9割近くを高師卒業生が占有していたため、師範学校校長への帝大卒業生の進出が疎外されていたことによると考えられる⁹⁾

このように帝大卒業生は、大正9年においては中学校を中心として分布していたが、昭和5年には師範学校、高等女学校の教員となる者も増加した。しかし、帝大卒業生のうち師範学校の校長となる者はそれほど多くなかった。

(2) 帝大卒中等教員の出身大学と出身学部

次に、帝大卒中等教員について、出身大学と出身学部の特徴を検討してみたい。まず、表2により、出身大学別に帝大卒中等教員の地位を検討してみよう。大正9年時点では、

東京帝大卒業生が帝大卒中等教員に占める割合は圧倒的に高く、教員で約9割、校長では約95%にまで達していた。京都帝大卒業生は帝大卒中等教員の約1割を占めていたが、校長を多く占めることができず、その割合は4.5%にすぎなかった。

ここに現れた東京帝大と京都帝大における中等教員数の差は、それぞれの輩出した卒業生数の差が反映されたものとも考えられる。すなわち京都帝大の創立年の遅さ、および卒業生数の少なさにより、こうした差が生じたと考えられ

表2 帝大卒中等教員・校長の出身大学別分布状況

単位：%，()内は人数

		東京	京都	その他	計
大正9	教員	88.9	9.5	1.6	100.0(494)
	校長	94.8	4.5	0.6	100.0(154)
昭和5	教員	61.9	21.5	16.6	100.0(796)
	校長	87.2	11.3	1.5	100.0(195)

出所：学士会『会員氏名録』各年度による。以下の表は特に注記しない限り同様の出所によった。

る。しかし、両校の輩出した卒業生数を見ると、全学部では京都帝大は東京帝大の4分の1、中等教員をもっとも多く輩出していた文学部卒業生においても6分の1にすぎなかった。したがって、京都帝大の創立年の遅さを加味しても、京都帝大は東京帝大ほど中等教員を輩出することができなかったことになる。

ところが、昭和5年になると、東京帝大卒業生が帝大卒中等教員に占める割合は約6割、京都帝大卒業生は約2割となり、量的には東京帝大卒業生のシェアは低下した。これらは、ほぼ両校の卒業生数を反映したものであり、この時期までに、京都帝大卒業生も東京帝大卒業生と同様に中等教員に参入するようになったと考えられる。

しかし、校長に占める割合では圧倒的に東京帝大卒業生が優位に立っていた。東京帝大卒業生が占めていた校長の割合は約9割であり、京都帝大では約1割にすぎなかった。こうした校長比の差は、京都帝大の創立の遅さを考慮し、京都帝大創立以降の両校の卒業生を比較しても同様であった。したがって、この時点では、中等学校校長への昇進には東京帝大卒業生が有利であったと考えられる。

次に、表3により、出身学部別の帝大卒中等教員の地位を検討する。大正9年の帝大卒教員には文学部の卒業生が圧倒的に多く、教員、校長ともほぼ9割を占めていた。その一

表3 帝大卒中等教員・校長の出身学部別分布状況

単位：%，（ ）内は人数

		文学部	理学部	他学部	計
大正9	教員	90.9	6.3	2.8	100.0(494)
	校長	88.3	5.8	5.8	100.0(154)
昭和5	教員	64.7	15.2	20.1	100.0(796)
	校長	91.3	2.1	6.7	100.0(195)

方で、文学部、理学部以外の学部卒業生は、教員は少数であったが、校長の割合はわずかに高くなっていった。

しかし、昭和5年になると帝大卒中等教員に占める文学部卒業生は減少し、理学部、およびそれ以外の学部からの卒業生が増加する。文学部卒業生の割合

は約65%にまで低下し、理学部卒業生は15.2%、その他の学部卒業生は20.1%と大きく増加していた。

こうした理学部、他学部の中等教員への参入の要因としては次の二点が考えられる。まず第一には、理学部卒業生数の相対的な増加である。東京帝大で見れば、大正9年までは914名にすぎなかった理学部の卒業生は、昭和5年までに1,800名とほぼ3倍に増加している¹⁰⁾ それに従って理学部卒業生が中等教員に占める割合も相対的に増加したものと考えられる。第二には、この時期における教員の待遇の相対的な上昇である。中等教員の給与は大正9年の俸給令改正により急激に上昇した。その後、昭和初期にかけての不況により、教員賃金の相対価格が上昇し、昭和6年にピークを迎える。昭和初年における帝大・高師卒中等教員の初任給は100円であり、それは企業などの初任給よりもはるかに高いものであった¹¹⁾ こうした賃金の高さにより、文学部以外からの中等教員への参入が誘発されたものと考えられる。

しかし、このような状況にもかかわらず、校長では文学部が圧倒的な優位に立っていた。校長に占める文学部卒業生の割合は9割を超え、その一方で文学部以外の学部卒業生が占める校長の割合は1割に満たなかった。とくに理学部卒業生の占める割合は大正9年よりも減少し、その値は2.1%にすぎなかった。すなわち、昭和5年時点の帝大卒中等教員内においては、校長は文学部卒業生の寡占状態にあった。

これらの結果から、戦前の帝大卒中等教員においては、東京帝大、および文学部の卒業生が量的にその多くを占めていたことがわかる。とくに東京帝大文学部の卒業生は帝大出身の中等教員内において圧倒的な優位を保っていた。帝大文学部卒業生は、大正9年では、帝大卒教員の83.2%、帝大卒校長の85.1%をも占め、昭和5年では、教員の割合は50.1%と減少するが、校長は依然として82.6%もの高い割合を占めていた。

3 文学部卒業生の就業状況

(1) 中等教員と高等教員への就業状況

前節で明らかにしたように、帝大による中等教員の供給には文学部が重要な役割を果たし、中等教員社会の中でも高い地位を得ていた。そこで帝大文学部に焦点を当て、中等教員の供給状況についての分析を行いたい。以下では、まず、『文部省年報』により文学部の特徴を明らかにした後、文学部卒業生の就職状況、および転職状況について検討し、文学部卒業生にとっての中等教員という職業の位置づけを考察する。

これまでも多く指摘されてきたように、帝国大学は多くのエリートを輩出し、その卒業生は官僚、技術者、経営者として指導的役割を担ってきた¹²⁾しかし、文学部卒業生はエリートの輩出に「ネグリジブルである」¹³⁾とされるよう

表4 東京帝国大学卒業生の学部別職業分布——昭和5年

単位：%，（ ）内は人数

	法学部	医学部	工学部	文学部	理学部	農学部	経済学部	計
官 吏	26.3	4.1	31.5	4.7	16.4	39.7	3.7	21.5
学 校 職 員	4.4	20.2	10.9	69.1	49.0	19.5	3.7	17.6
銀行会社員	30.8	5.8	47.5	4.9	16.8	11.1	60.7	28.2
そ の 他	23.3	66.6	3.0	8.7	2.1	17.1	5.7	19.9
学 生	0.7	0.8	1.4	7.1	4.2	1.8	3.4	2.0
未定・不詳	14.6	2.5	5.7	5.5	11.5	10.7	22.8	10.7
計	100.0 (13217)	100.0 (3840)	100.0 (6487)	100.0 (3687)	100.0 (1540)	100.0 (2974)	100.0 (2535)	100.0 (34280)

出所：『文部省年報』昭和5年度より作成。

に、彼らの進路は他の学部卒業生とは大きく異なり、その多くが教員となっていた。表4にはその状況を検討するため昭和5年時点における東京帝大卒業生全体の学部別就業状況を示した。多くの学部卒業生が主に官公吏、銀行会社員に就職していたが、文学部卒業生ではそれらに就職する者は非常に少なくなっていた。文学部卒業生にもっとも高い割合を占めていた職業は「学校職員」であり、この時点では7割を占め、それは突出したものであった。このように帝

大文学部は「学校職員」、すなわち教員の供給機関であり、その機能は他の学部とは大きく異なっていた。

しかし、こうした「学校職員」の内容は不明であり、学校段階別の分布状況は既存の統計資料では明らかにすることはできない。そこで以下では、学士会の名簿により詳細に文学部卒業生の就業状況を検討する。

表5 出身大学別、帝国大学文学部卒業生の就業状況

単位：%，（ ）内は人数

		教 員			官公吏	その他	学 生	無職不明	計
		中等	高等	その他					
大正9	東 京	25.8	31.5	3.6	6.2	9.3	3.3	20.3	100.0(1590)
	京 都	18.0	18.5	3.8	10.0	14.2	11.8	23.7	100.0(211)
	計	24.9	30.1	3.6	6.7	9.8	4.3	20.7	100.0(1801)
昭和5	東 京	16.7	40.8	2.6	7.3	8.4	3.5	20.8	100.0(2394)
	京 都	18.3	35.6	3.0	4.5	7.3	9.3	22.0	100.0(464)
	その他	26.5	35.0	9.4	3.4	3.4	9.4	12.8	100.0(117)
	計	17.3	39.7	2.9	6.7	8.1	4.6	20.7	100.0(2975)

表5は、帝大卒業生の就業状況を出身大学別に示したものである。まず、総計を見れば、文学部卒業生がもっとも多く就業していた職業は高等教員、すなわち大学、専門学校などの教員であったことがわかる。高等教員が文学部卒業生に占める割合は大正9年には3割、昭和5年には4割にまで達していた。一方、中等教員は、大正9年において24.9%と約4分の1を占めていたが、昭和5年になると17.3%に減少していた。こうした高等教員の相対的な増加は、大学令以降の高等教育機関の拡張による高等教員需要の増大を反映したものであると考えられる。

このように『文部省年報』などにおいて「学校職員」とされた文学部卒業生の多くが高等教員であったことになる。すなわち、少なくとも大正9、昭和5年においては、帝大文学部は主に高等教員の供給機関として機能し、中等教員は高等教員ほど輩出されていなかった。

次に東京帝大と京都帝大の差を中心に出身大学別に検討してみたい。東京帝大文学部卒業生の就業状況は、ほぼ文学部卒業生全体の状況と同じであった。しかし、大正9年には京都帝大卒業生に高等教員の占める割合は18.5%と2割以下でしかなかった。また、中等教員の割合も18.0%と東京帝大を大きく下回っていた。

こうした東京帝大と京都帝大の差は、京都帝大の創立の遅さが反映されているとも考えられる。そこで両者の条件を等しくするため、京都帝大がはじめての卒業生を輩出した明治42年以降の両帝大文学部卒業生の就職状況を比較してみよう。大正9年における明治42年以後の東京帝大文学部卒業生に占める高等教員の割合は25.9%と全体よりも減少するが、それでも京都帝大卒業生の18.4%よりも高い割合を示していた。また、中等教員の割合は25.4%と卒業生全体と大きく変わっていなかった。したがって、京都帝大の創立の遅さを加味しても、京都帝大卒業生に占める中等教員の割合は東京帝大卒業生よりも低くなっていたことになる。

これらの結果から、大正9年においては、京都帝大文学部は中等・高等教員に十分に卒業生を供給することができなかったと考えられる。これは、当時の中等・高等教育界において東京帝大の勢力が強かったためと推測される。

しかし、昭和5年になると東京帝大、京都帝大の格差は小さくなる。高等教員に占める割合は、東京帝大が40.8%、京都帝大が35.6%と京都帝大の割合がわずかに少ないものの、両者の値はほぼ同じとなっていた。また、中等教員の割合では、東京帝大が16.7%、京都帝大が18.3%と、むしろ京都帝大の割合が高くなっていた。このことから、昭和5年時点においては、東京帝大、京都帝大の就業状況の差はほぼ解消され、京都帝大からも東京帝大と同様に、中等・高等教員が輩出されていたことがわかる。

次に、表6により、帝大文学部卒業生の初職を検討してみたい。なお、当年度の卒業生のみでは分析の対象者が少なくなるため、ここでは前年度の卒業生も含めることにする。すなわち、表6の大正9年には大正8、9年の卒業生、

表6 帝国大学文学部卒業生の初職

単位：%，（ ）内は人数

	教 員			官公吏	その他	学 生	無職不明	計
	中 等	高 等	その他					
大正9	15.3	9.9	0.9	9.0	13.5	26.1	25.2	100.0(111)
昭和5	18.2	14.2	4.7	4.9	6.3	14.6	37.3	100.0(445)

昭和5年には昭和4、5年の文学部卒業生の就職状況を示している。

まず、初職に占める高等教員の割合は、文学部卒業生全体よりもかなり低くなっていたことがわかる。しかし、それでも大正9年には9.9%、昭和5年には14.2%の者が初職から高等教員となっており、その割合は低くはなかった。その内訳を見れば、高等学校、私立の大学・専門学校の教員に就職している者が多く、大学院に進学することなく高等教員となる道も開かれていたことがわかる。また、主に大学院生であった「学生」の割合は、大正9年には26.1%、昭和5年には14.6%とかなり高い値を示していた。後で指摘するように、「学生」の多くが高等教員となっていたから、文学部卒業生の多くが、初職から高等教員という進路を選択していたと考えられる。

次に、初職に占める中等教員の割合は、大正9年に15.3%、昭和5年に18.2%と2割以下でしかなかった。しかし、この値は他の職業の割合よりも高いものであり、帝大文学部卒業生にとって中等教員が重要な就職先の一つであったことがわかる。なお、こうした初職における中等教員の割合の低さは、大正9年には、中等教員の賃金の相対価格の低さ、昭和5年には、高等教育機関卒業生の就職難が影響を与えたものとも考えられる¹⁴⁾

ところで、『東京大学百年史』は、明治期の文学部卒業生の初職に言及し、「学校教職員」とされた者の「ほとんどが中等教員であったと推測される」¹⁵⁾としている。しかし、本分析に見られるように、文学部卒業生のうち初職が教員であった者に占める中等教員の割合は、大正9年、昭和5年の両年においては5割前後でしかなかった。この結果をそのまま『文部省年報』などの「学校職員」の

項目に適用することはできないが、これらの時点においては教員中に占める中等教員の割合はほぼ半数にとどまっていたと考えられる。つまり、少なくとも大正9年、昭和5年時点においては「学校職員」のほとんどが中等教員とは言えないことになる。

(2) 中等教員から高等教員への転職

『東京大学百年史』によれば、「学者の理想的な職歴は、まず大学院に籍を置きつつ在京の高等教育機関や中学校の講師をつとめ、ついで大学院を辞してその教授や地方の高等学校の教授あるいは文科大学の助教授となり、外国留学後、文科大学の教授に就任し、教職に一生を終える」¹⁶⁾とされている。しかし、実際にこのようなキャリアをとった者やそれ以外のキャリアをとった者の割合、またその具体的な内容などは明らかになっていない。そこで、以下では帝大文学部卒業生の転職状況を検討し、彼らのキャリアの一端を明らかにする。また、そうした分析を通じて、帝大文学部卒業生にとって中等教員がいかなる位置にあったのかを考察する。

表7 帝国大学文学部卒業生の転職状況——大正9年～昭和5年

単位：％，（ ）内は人数

			昭和5年							計
			教員			官公吏	その他	学生	無職不明	
			中等	高等	その他					
大正9年	教員	中等	51.2	28.1	2.5	4.6	2.7	0.3	10.6	100.0(367)
		高等	2.5	83.4	0.9	3.6	2.2	0.0	7.4	100.0(447)
		その他	27.8	38.9	13.0	3.7	3.7	0.0	13.0	100.0(54)
	官公吏 その他 学生 無職・不明	官公吏	2.0	36.7	2.0	41.8	5.1	0.0	12.2	100.0(98)
		その他	3.8	16.5	2.3	4.5	60.9	0.0	12.0	100.0(133)
		学生	5.5	69.1	0.0	5.5	3.6	0.0	16.4	100.0(55)
無職・不明	11.9	25.7	1.9	6.3	7.5	0.0	46.6	100.0(268)		
計		18.0	46.6	2.1	7.2	9.1	0.1	16.9	100.0(1422)	

表7には、大正9年から昭和5年における帝大文学部卒業生の転職状況を示した。この表から大正9年から昭和5年において中等教員にとどまっていたも

のはほぼ半数にすぎないことがわかる。大正9年時点において中等教員であった者は、その約3割が高等教員へと転職していた。すなわち、中等教員からは高等教員への移動ルートが形成されていたものと考えられる。大正9年時点において高等教員であった者は、83.4%が高等教員にとどまっており、高等教員からの移動は非常に少なくなっていた。また、大正9年に学生であった者は、その多くが大学院生であり、彼らの約7割が高等教員となっていた。

表8 帝国大学文学部卒業生の転職状況(大正5～9年の卒業生)——大正9年～昭和5年
単位：%，()内は人数

			昭和5年							計
			教 員			官公吏	その他	学 生	無職不明	
			中 等	高 等	その他					
大正9年	教 員	中 等	33.3	49.1	0.0	7.0	5.3	1.8	3.5	100.0(57)
		高 等	2.9	91.2	0.0	2.9	2.9	0.0	0.0	100.0(34)
		その他	22.2	44.4	22.2	0.0	11.1	0.0	0.0	100.0(9)
	官 公 吏 そ の 他 学 生 無 職・不 明	官 公 吏	4.5	63.6	4.5	9.1	13.6	0.0	4.5	100.0(22)
		そ の 他	6.9	31.0	0.0	3.4	51.7	0.0	6.9	100.0(29)
		学 生	2.4	73.2	0.0	4.9	4.9	0.0	14.6	100.0(41)
		無 職・不 明	8.1	35.5	1.6	6.5	12.9	0.0	35.5	100.0(62)
		計	12.2	54.3	1.6	5.5	13.0	0.4	13.0	100.0(254)

こうした状況は、とくに若い世代において顕著であった。表8には大正5年から大正9年の卒業生のみでの移動状況を示した。大正9年に中等教員であった者を見れば、彼らのうち、中等教員にとどまっていた者は3分の1にすぎず、ほぼ半数の者が高等教員へと転職していた。その一方で、高等教員にとどまっていた者の割合は、卒業生全体よりもさらに高く、9割以上となっていた。

このような中等教員から高等教員への転出率は、卒業年度が古くなるに従って低くなっていた。すなわち、明治44年から大正4年の卒業生では36.6%、明治39年から明治43年の卒業生では23.7%、明治38年以前の卒業生では15.3%であった。

このように大正9年から昭和5年においては、帝大文学部卒業生が中等教員

から高等教員へと転職する割合は非常に高く、とくにそれは若い世代において顕著であった。すなわち、この時期の帝大卒業生には中等教員から高等教員へというキャリアパターンが確立しており、しかもそうした転職はキャリアの初期に生じていたことになる。転職行動が威信の低い職業から高い職業へと一般に行われるとすれば、文学部卒業生の多くにとって、もっとも望ましい職業は高等教員であり、中等教員はその下位に位置づけられていたと考えられる。

中等教員と高等教員の位置関係は、戦前の給与体系にも現れていた。戦前の教員には、初等、中等、高等という学校段階、あるいは学校種別において明確な俸給表が設定され、それぞれの学校段階の高さに従って給与も高く設定されていた。実際に、ある試算によれば、大正9年における中等教員の給与(年額)の平均が1,393円であったのに対し、高等教員では2,050円とほぼ1.5倍となっていた¹⁷⁾ こうした高等教員の給与の高さにひかれ、中等教員であった帝大卒業生は高等教員へと転出していったと考えられる。

また、帝大文学部卒業生による中等教員の忌避は、彼らの回想にも現れている。例えば、大正15年に京都帝大文学部を卒業した柳田謙十郎は次のように述べている。

せっかく大きなぎせいははらって大学を卒業しても、研究室にのこって大学教授になることを目あてに勉強をつづけるという便宜もなかった。(中略)それで藤井教授からすすめられるままに新潟師範学校に就職することにきめた。せっかく三年間学問をやりながら、またふたたびもとのもくあみの田舎教師になるのかと思うとあまりよい気持ちもしなかったが、先生からいろいろ叱られたりなぐさめられたりされ、(中略)やむを得ず赴任することになった¹⁸⁾

このように文学部卒業生にとって望ましい職業は高等教員であり、中等教員は高等教員、あるいは他の職業への就職機会を待つための一時的な職業であったことが考えられる。いいかえれば、帝大文学部卒業生にとって中等教員は決

して望ましい職業ではなく、彼らは中等教員にとどまりながら転職機会をうかがっていたと考えられる。

ただし、こうした転職率の高さは、この時期に特有のものであったとも考えられる。すなわち、大正後期における高等教育機関、とくに高等学校の拡充による高等教員需要の増大が、こうした転職率の高さの主要な要因であったとも推測される。大正後期には高等学校、および専門学校がさかんに設立され、高等教育機関数は大正4年の108校から、昭和5年の308校へとこの20年間にほぼ3倍に増加した。それに従って高等教員数も急速に拡大し、大正4年の4,364人から昭和5年の15,235人へと3倍以上となった¹⁹⁾ この時期におけるこのような高等教育機関の拡充は、多大な高等教員需要を作りだした。それにより、この時期における高等教員の不足を補うために中等教員から高等教員が補充され、帝大文学部卒業生における中等教員から高等教員への転職率が拡大したとも考えられるだろう。今後、他の時点における帝大文学部卒業生の転職動向を検討し、中等教員から高等教員への転職状況の推移を明らかにする必要があるだろう。

4 考察と課題

以上、大正9年、昭和5年における中等教員内での帝大卒業生の分布状況、および帝大文学部卒業生の中等教員への就職、また中等教員からの転職状況を検討してきた。本分析により明らかになった点をまとめれば以下のようなようになる。

- 1) 帝大卒業生は、主に中学校に分布し、中等教員内においては量的には少数派であったが、高い割合で校長を輩出していた。また、帝大卒中等教員内においては、校長は東京帝大文学部卒業生による寡占状態にあった。
- 2) 文学部卒業生の就業先は主に高等教員であり、中等教員の割合は高等教員よりも低くなっていた。また、彼らの初職においても中等教員の割合はそれほど高くなかった。
- 3) 帝大文学部を卒業して中等教員となった者の多くが高等教員へと転職

し、とくにそれは若い世代において顕著であった。このことから帝大文学部卒業生にとって、中等教員は高等教員の下位に位置づけられるものであったことが明らかとなった。

さて、このような帝大文学部卒業生のキャリアは日本の中等教員、及び高等教員にとっていかなる意味を持っていたのであろうか。以下、二点について簡単に考察しておきたい。第一は、中等教員社会、特に高師卒業生に与えた影響である。高師も帝大と同様に多くのいわゆるエリート中等教員を輩出していた。しかし、高師の卒業生は主に中等教員に就職し、彼らのキャリアはそこで閉ざされていた。高師卒業生のキャリアの最終地点は中等学校校長、とくに師範学校の校長であり、彼らが高等教員となるには、帝大への進学が重要な条件となっていた²⁰⁾。このような帝大と高師の卒業生に生じていたキャリアの差は、彼らの精神形成に影響を与えたと考えられる。戦前においては、帝大卒業生と高師卒業生の教員としての資質がさかんに議論されていた。とくに高師卒業生は「規矩準繩を墨守」し、帝大卒業生よりも保守的であるとされていた²¹⁾。これまで、こうした両者の性格の差が形成された要因は、両機関の教育課程の違いとされてきた。しかし、中等教員内のみでしかキャリアを進めることができなかつた高師卒業生と高等教員への道も開けていた帝大卒業生という両者のキャリアの差も影響を与えていたと考えられる。また、それは帝大卒中等教員にも影響を与えていたであろう。帝大文学部卒業生の中には高等教員への転職を望みながらも、中等教員にとどまらざるを得ない者もいたことが推測される。帝大文学部卒業生による高等教員の優先は、こうした者の教員としてのモラルを低下させる一因となっていたと考えられる²²⁾。

第二は、中等教員から高等教員への流動性の持つ意味である。大学卒業生の中等教員への就職とその後の高等教員への転職は欧米にも多く見られた現象であった。例えば、19世紀のフランスでは大学教授へのキャリアの出発点としてリセ教員があった。また、ドイツにおいても19世紀には大学卒業生の多くが中等教員となり、それが高等教員へと転職していた²³⁾。こうした現象は高等教員の

需給関係と密接な関係を持ち、多くの国において高等教員の不足は中等教員により補われていたことを示している。しかし、高等教育機関の拡大が停滞し、大学教授職の専門職化が進むに従い、中等教員から高等教員への移動は減少したと考えられる。こうしたことは中等教員の分析を行う際には、高等教員との関係を見逃すことができないことを示している。また、今後、この方面からの比較研究を行う必要がある。

注

- 1) 鈴木博雄『東京教育大学百年史』図書文化、1978年、101-114頁。
- 2) 山田浩之「戦前における中等教員社会の階層性」『教育社会学研究』第50集、東洋館出版社、1992年。
- 3) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 通史二』東京大学、1985年、181頁。帝大文学部卒業生の就職状況については、川村肇「東京帝国大学教育学科の講座増設に関する一研究」『東京大学史紀要』第10号、1992年においても部分的に指摘されている。しかし、これまでの帝大卒業生の分析は法学部、工学部などが中心であり、文学部卒業生に関する研究はほとんどなされていない。
- 4) 学士会への加入は任意であり、その名簿は帝大卒業生全員を網羅しているわけではない。例えば、昭和5年の名簿に記載されている東京帝大文学部卒業生は、同年の『文部省年報』において生存しているとされる者の約7割であった。しかし、帝大卒業生全体の動向を見る上では、十分であると考え、この資料を使用することとした。
- 5) 大正7年以前の帝大文学部の正式名称は「文科大学」であるが、ここでは、煩雑さを避けるため、すべて文学部に統一した。
- 6) 筆者は、これまでとくに高師を中心に、入学者の属性、および卒業者のキャリアの検討を行ってきた。本稿はそれを発展させ、戦前の中等教員社会における帝大—高師関係の一端を明らかにするためのものである。また、これまで戦前の中等教員についての研究の主要なものとしては、牧昌見『日本教員資格制度史研究』風間書房、1971年、中内敏夫・川合章編『日本の教師2 中・高教師のあゆみ』明治図書、1970年、広島大学日本東洋教育史研究室『中等教員史の研究』（第一輯）、1987年などがある。しかしながら、これまで戦前の中等教員養成、あるいは中等教員社会の状況を明らかにする体系的な分析は十分に行われていると言えない。
- 7) 帝大卒、高師卒の中等教員の分布状況については、山田(前掲)を参照されたい。ただし、ここで使用した値は、山田(前掲)に使用した値を、再分析により若干修正している。また、ここでの値は、全国の教員分布と比較するため国内に就職していた者のみを示し、植民地や海外で就職していた者は除外した。

- 8) 小原国芳「教育改造論」『小原国芳全集』2, 玉川大学出版部, 1967年, 57頁。
- 9) 山田(前掲)参照。
- 10) 『文部省年報』各年度による。
- 11) 山田(前掲)参照。
- 12) 帝大卒業生が果たした指導的役割については天野郁夫「産業革命期における工業技術者の育成形態と雇用構造」『教育社会学研究』第20集, 1965年, 秦郁彦『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会, 1981年などの他, 麻生誠による「近代日本におけるエリート構成の変遷」『教育社会学研究』第15集, 東洋館出版社, 1960年などの一連のエリート研究に詳しい。
- 13) 麻生(前掲)158頁。
- 14) 中等教員の賃金については山田(前掲論文)参照。また, 昭和初期においては, 中等教員への就職が優先されていた高師においても就職は困難であり, 「不況のため就職の義務を果たし得ないものが数名いた」(広島高等師範学校創立八十周年記念事業会『追懐』275頁)とされている。
- 15) 『東京大学百年史』(前掲), 181頁。同様の試算は, 寺崎昌男「戦前日本における中等教員養成制度史」日本教育学会教師に関する研究委員会編『教師教育の課題』明治図書, 1983年, 川村(前掲論文)などにも見られる。
- 16) 『東京大学百年史』(前掲), 181頁。
- 17) 『今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について』(中央教育審議会答申)文部省, 1971年, 520頁より算出。
- 18) 柳田謙十郎『自叙伝』(柳田謙十郎著作集1)創文社, 1967年, 76頁。同様の回想は, 中野好夫「就職落第の記」辰野隆編『落第読本』雪華社, 1955年など多数見られる。
- 19) 『文部省年報』各年度による。
- 20) 高師卒業生のキャリアについては, 片岡徳雄・山崎博敏編『広島高師文理大の社会的軌跡』広島地域社会研究センター, 1990年, 山田浩之「広島高師卒業生の社会移動」(修士論文)を参照されたい。
- 21) 帝大と高師をめぐる論争については, 船寄俊雄「大正期高等師範学校存廃論争にみる中等学校教師像の性格」『教育学研究』第53巻, 第2号, 1986年6月に詳しい。
- 22) ある高師卒業生は「帝大出で中等学校に務めた人は, 例外はあるとしても一種の落伍者であり, 「特に地元出身の帝大出は, 気位ばかりが高くて投げやりな人が多かった」と述べている(『岡山尚志』尚志会岡山県支部, 1989年, 30頁)。これは, 高師卒業生による回想であり, 帝大卒業教員の欠点が誇張されている可能性もある。しかし, このような帝大卒業教員に対する批判は当時の状況の一端を示していると考えられる。
- 23) フランスについては Karady, V., 1985 'Teachers and Academics in Nineteenth Century France. A Socio-Historical Overview,' in Conze, W. and Kocka, J. eds. *Bildun-*

gsbürgertum im 19. Jahrhundert, Teil I, Stuttgart, ドイツについてはベリング, R., 望田幸男他訳『歴史のなかの教師たち——ドイツ教員社会史——』ミネルヴァ書房, 1987年などにおいて中等教員の出自, およびキャリアについて触れられている。